

## 湊のやど

「せとうち 湊のやど」を構成している 2 軒の建物は、外からは似ても似つかないものに見えます。異彩を放つスペイン植民地復興様式のような島居邸と、その隣に建つ江戸時代の出雲屋敷は、じつに奇妙なペアです。それでもちぐはぐな外観の裏にあるのは慎重に修復された 2 棟の歴史的建築物であり、それぞれが尾道の歴史の異なった部分を見せてくれます。また、どちらの建物も設備が充実したデラックスな宿泊施設で、尾道市民としての暮らしを体験する機会を宿泊客に与えてくれます。

江戸時代（1603-1868）に建てられた時、出雲屋敷は神社仏閣のみだった山腹にある数少ない建物のひとつでした。当時ここは出雲国（現在の島根県）松江藩の役人や商人が暮らす家であり、出張所だったことから、出雲屋敷と呼ばれました。桂離宮の修理事業をはじめ、伝統的な日本建築の保存・修復に貢献した建築史家、中村昌生氏による全面的リノベーションを経て、出雲屋敷は 2013 年に宿泊施設としてオープンしました。

中村氏は配管、フル装備のキッチン、欧米スタイルのリビングルームといった現代の利便性を屋敷につけ加えました。見事な茶室と隣接する庭は、どちらも日本の茶室建築を専門とする中村氏によって慎重に復元されたものです。伝統的要素と現代的要素のバランスが取れているため、宿泊客は慣れ親しんだ利便性を手放すことなく時代を遡ることができます。

隣に建つ島居邸からは尾道水道を一望できます。1931 年に豪商の蔵を備えた住居として建てられた島居邸の、スペイン風の瓦屋根とゴツゴツしたモルタルの外壁は、当時勢いを増していた西洋建築の影響を表しています。家の中は広々とした空間になっており、出雲屋敷に較べて引き戸や畳が少ないものの、それでも間違いなく日本的な感じがします。2 つのスタイルをミックスしたこの様式は擬洋風建築として知られており、西洋風の外観と間取りを用いながら、日本の技術で建てられた建物です。

建築家である桐谷昌寛氏による 2012 年のリノベーションは、建物の元の外観を残してオープンなレイアウトも強調することに力点が置かれました。蔵の中は元からあった木の梁が残されており、高い天井が空間感覚を印象づけます。島居邸は 2 つの棟から成ります。「望（ぼう）」と呼ばれる東棟が元の住居で、「蒼（そう）」と呼ばれる西棟が蔵を改造した建物です。